

☆ 研究室活动 ☆

【语言研究室】6月11日下午在“中心”接待室召开了语言研究会。神野藤昭夫教授作了题为「关于源氏物语中的『やつる』『やつす』」的发表，从民俗学的角度论述了《源氏物语》。客座研究员朱京伟作了题为「关于现代汉语中的日语借词」的发表，对汉语中借用的日语词汇进行了系统的分析，与会者对此展开了讨论。下次研究会将于9月10日（星期五）举行。

【社会研究室】5月28日（星期五）在电教室召开了社会研究会。周维宏讲师作了「中日农村工业化的比较」的研究发表，就中日农村工业化的方式和特点进行了比较。

<公> 与 <私>

神野藤昭夫

这是教师进修班的课即将结束时的某一天课堂上的情景。

今天没见到总是面带笑容的H君。说是因为妻子即将临产，回内蒙古去了，尚未返京。这么说来，也不见胡子S君。他的当小学教师的妻子也有了身孕，前些日子说妻子身体状况不好，回家住了些日子。预产期正赶上他在日本研修，为此他非常担心。是不是他妻子的身体又不好了呢？

当然仅从这两个例子来推测是很大胆的，中国的男性似乎非常关心妻子。也许是因为实行独生子女政策的缘故，孩子的出生在夫妇间有着至关重要的意义？

日本人就不是这样。若是在研修期间跑回妻子那里去，那一定是出现了相当紧急的情况。在工作单位这样<公>的场所，不太谈起孩子出生那样<私>的事情。即使内心很担心，也常装出「没什么大不了的」那样平静的神态。<私>与<公>之间有着明确的界限，大家都有不该在<公>的领域内掺入<私>的成分的观念。

不过，学生们互相熟知对方的私事更令我吃惊。O小姐的母亲和未婚夫从上海来了，C小姐将于研修结束后回西安结婚，如此等等。我甚至为作为教师的自己知道那么多他们的私事而感到好奇。<私>的消息就这样不知不觉地也传到了我的耳朵里。

这同时是否也是中国是个口传信息社会的一个证据？还是在同一大学校园内共同生活的自然反映？我想该是二者兼有的。这正好产生了在<公>的生活里<私>的消息暴露无遗且并不以为怪的现象。

这大概还跟区别<公>与<私>的意识淡薄有关。

离炎热的夏日还远的时候，喜欢游泳的我常去宾馆的室内游泳池。那里常有看上去根本不象自己付了钱来游泳的人们拿着肥皂、香波自得地冲着淋浴。不久，我觉察到他们是工作人员的亲戚、熟人什么的。能使用这样的特权是中国社会的一个方面，我曾在某本书上看到过类似的话。这里似乎也有着<公>与<私>的粗暴的混合，形成了对这种公私混同并不觉得有什么不好的精神构造。这是否就是中国式的<个人主义>？

我举这些例子既不是为了加以指责，也不是为了说明自己的发现。无论是日本人还是中国人，通过对异文化的接触，就能从生动的对比中看到各自认为是理所当然的事情，我只是对此感到吃惊而已。

以一个文化为基准来对异文化指手划脚是很容易的。与此相比，把不同的文化当作不同的东西来认识更为重要。在不同性质的文化交流中，在认识对方性质的同时互相尊重、抗衡是非常重要的。为此，从这个意义上来说，我衷心期待着北京日本学研究中心的学生们将来能成为日中间的真正的桥梁。

据说H君的妻子虽然难产，但终于平安地生下了一女孩。祝愿S君的妻子在他访日研修期间安然地生下健康的婴孩。

(1993.6.16)

通知： 由于从7月3日起进入暑假，『北京日本学研究中心通讯』7、8月将停刊，9月起重新发行。今后还望大家给予关照。

【ニュース】

- ◇6月4日(金)午後本センターにおいて研究室活動に関する座談会が開かれた。言語研究室副主任の徐一平氏と社会研究室主任の李書成主任が、それぞれ今学期の活動についての総括を行い、併せて今後の研究室活動の形式や内容について、研究室のメンバーや客員研究員から意見を聞いた。
- ◇6月15日(火)午前10:00、国際交流基金中国特別事業班の馬場克樹氏が、本センターを来訪された。また李徳主任、李書成主任代理、陳海良副主任、池田温主任教授を始めとする関係者と馬場氏との間で、本センターの各委員会活動やカリキュラム編成などについて、細かな意見が交わされた。
- ◇公開講座：5月27日、6月3日、10日、17日の各木曜日、恒例の公開講座が開催された。講演者と演題は以下の通り：日笠完治「日本国憲法の基本原理」、佐々木史郎「絹と毛皮—山丹貿易の実像」、尾藤正英「思想を通じて見た日本と中国との比較」、加藤晴子「中国語の主語」。
- ◇專題講座：6月11日(金)中国人民大学程斌教授が「晚清民間文学」と題する專題講座を行った。また6月23日(水)李書成教授が「中国の日本学研究 現状と展望」と題する專題報告を行った。

＜科学研究動向＞

- ☆北京日本学研究センターでは、現在『中国日本学研究文献目録彙編』（暫定名）を編纂している。この本は古代から中国で出版された日本学関係の著作、論文3万編約300万字を収集（索引を含む）したものである。1991年以来、30人余名が前後してこの仕事に携わり、既に項目分類がほぼ完成し、来年の出版が待たれている。
- ☆日中双方の専家の協力により、本学期は既に『日本学論叢Ⅲ』と『第4回日本学中日シンポジウム論文集』を編集出版した。『日本学論叢Ⅳ』は既に三校まで完成し、7月末の出版が待たれている。
- ☆第5回の客員研究員は、基本的には既に論文の作成を完了し、25日より研究成果の発表を順次行い、これを基に論文の整理をし関連の刊行物に発表する。具体的な発表日程は以下の通り：唐 磊、朱京偉、姚灯鎮（6月25日午後2:30～5:30）；孔繁志、徐 冰、李均洋（6月30日午後2:30～5:30）；徐晓光、王克非、李曉東、郭慶光（7月2日午後2:00～5:30）。

研修コース訪日研修

北京日本学研究センター日本語研修コース第8期生29名は、6月24日から7月23日までの間、日本で研修を行う。以下にその主な研修日程を紹介する。

6月24日(木)	北京発(NR906便)・国際交流基金日本語国際センター(浦和)着
25日(金)	国際交流基金中国班との談話会・歓迎パーティー
28日(月)	NEC本社・皇居外苑・中国大使館訪問
30日(水)	講義・茶道デモンストレーション
7月1日(木)	早稲田大学訪問
2日(金)	講義・生け花デモンストレーション
3日(土)	ホームステイ(～4日)
6日(火)	箱根見学
7日(水)	箱根見学・京都着
8日(木)	京都・奈良参観(～10日)
11日(日)	瀬戸大橋見学・広島着
12日(月)	(広島)宮島・平和記念公園見学・マツダ工場見学・高等学校訪問(～13)
14日(水)	岐阜着・岐阜県美術館・岐阜市歴史博物館見学
15日(木)	(岐阜)小学校・中学校視察・薬博物館・伝統工芸見学(～16日)
17日(土)	岐阜発・名古屋・日本語国際センター着
19日(月)	講義・歌舞伎鑑賞
22日(木)	歓送会
23日(金)	日本語国際センター発 北京着

通矢口：『北京日本学研究センター通讯』は、7月3日より夏期休暇に入るため、7月・8月は休刊とし、9月に再び刊行いたします。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

☆ 研究室活動 ☆

【言語研究室】6月11日（金）午後2:30、センター接待室にて言語研究会が開催された。神野藤昭夫教授の「源氏物語における『やつる』と『やつす』について」と題する発表においては、『源氏物語』が民俗学的視点から論じ直され、また宋京偉客員研究員の「現代中国語における日本語の借用語について」と題する発表では、中国語に取り入れられた日本語の問題が系統的継時的に明らかにされて議論を呼んだ。次回の研究会は9月10日（金）の予定である。

【社会研究室】5月28日（金）電教室において社会研究会が開かれた。周維宏講師が「中日農村工業化の比較」と題する研究発表を行い、中日の農村工業化の方法と特徴について比較がなされた。

<公> と <私>

神野藤昭夫（かんのとう・あきお）

研修コースの授業もそろそろおわりに近づいたある日の授業での一こま。

今日はいつもニコニコしているH君の姿がみえない。奥さんの出産が近づいたので。内蒙古に帰ったまま、まだ北京に戻って来ないのだという。そういえば、髭のS君の姿も見えない。彼の小学校の先生をしている奥さんも身重で、奥さんの具合が悪いといって、しばらく家に帰っていた時があった。出産予定日が日本での研修期間中にあたるそうで、彼はそれをしきりに心配していたが、まだ奥さんの加減が悪いのだろうか。

たった二例から推測するのは大胆だが、中国の男性はそうとう奥さん思いのようだ。一人っ子政策のせいで夫婦の間で出産のもつ意味がきわめて大きいからでもあろうか。

日本人の場合、こうはいかない。研修中なのに、奥さんのところに飛んでいったとなると、これはそうとうに悪い事態ということになる。一般に職場のような<公>の場では、出産のような<私>の話題はあまり持ち出さないものだ。内心、心配してはいても、「大したことありませんよ」くらいで平静を装うのが常である。<私>と<公>との間には截然とした区別があって、<公>の領域に<私>を持ち込むのはよくないという観念があるからだ。

それにしても、学生たちが仲間の消息をよく知っているということにも驚かされる。今、Oさんの母親と彼女の婚約者が上海から来ているとか、Cさんは研修が終わって西安に帰ったら結婚することになっているとか。彼らのプライバシーのくまぐまにいたるまで、どうして教師である僕が知っているのだろうかと思えるほど、<私>の情報がいつのまにかこちらの耳にも伝わってくるのである。

これまた中国が口コミによる情報社会であることの証なのだろうか。それとも、同じ大学の構内で寝食をともにする生活のおのずからの反映なのだろうか。そのいずれでもあるに違いないが、ここでも<公>の生活の中に<私>の情報がむきだしになって流れ出て、それがふしぎでない状況があるように思われる。

それは<公>と<私>を区別する意識が希薄ということにも繋がるだろう。

まだ夏の暑さには遠い時分、水泳好きな僕は賓館の室内プールにしばしば泳ぎに出かけた。すると、とても金を払って泳ぎに来たとは思われない人々が、石鹸やシャンプーをもちわがもの顔にシャワーを使っている。そのうち、どうやら関係者の親戚や縁者らしいと見当がついた。そういえば、こうした特権を行使できるのが中国社会の一面であると、ものの本にあったことを思い出したが、どうやらここにも<公>と<私>とのやみくもな融合があって、それがこうした公私混同をべつだん悪いことと感じない精神構造を生み出しているように思う。これが中国流の<個人主義>というもののなのだろうか。

僕は、こうした事例を批判しようとして挙げているのでもなければ、ささやかな発見をしたつもりで挙げているのでもない。日本人にとっても、中国人にとっても、お互いにあたりまえと思われることが、じつは異なる文化と出会うことによって、生き生きと相対化されて見えてくることに感心しているのである。

ひとつの文化を尺度にして、異質の文化を批判することはたやすい。それよりも異なる文化を異なるものとして認識することが大事なのだ。異質の文化同士の交流には、相手の異質性を深く知ると同時に互いに尊重しあいつつ、拮抗することが大切になってくる。そして、そのような局面において日本学研究センターの学生諸氏が、いずれは日中の真の架け橋となるような存在としてご活躍されることをこころから期待したい。

H君の奥さんは難産ではあったが、無事女兒を出産されたとのこと。またS君の日本滞在中に、彼の奥さんが無事元気なお子さんを出産なさることをお祈りする。

(1993.6.16)